

東京湾沿岸巡検

千 田 智 子

4月13日快晴、都合のつかぬまま、とうとう2年生の春に持ち越された一泊巡検が行われた。井内先生のご指導の下、東京に始まり房総半島を南へ、フェリーで海を渡って三浦半島へと、東京湾沿岸をぐるり一周しようという内容である。

集合したJR新木場駅から京葉線に乗車、まず葛西臨海公園へ。巡検が始まったばかりで皆まだ焦点が定まらない、といった風であった。「へーきれい。」などと無責任な感想をもらして見学は終わり、一路舞浜へ。ベイエリアNKにて、舞浜リゾートエリア地区における現状の問題点や将来性等についてお話を伺った。そろそろ皆の目も真剣にならざるを得ない。ディズニーランドをシンボルとしつつ、東京圏のはずれという微妙な立地条件を最大限に生かして各企業がしのぎを削る姿をかいま見ることができた。

次の巡検先は、あの幕張メッセを擁する幕張新都心である。完成予定年度は2000年、まだ空地も目立つが開発規模は522ha。新宿副都心が96ha、横浜みなとみらい21が186haというのだから、その計画の遠大さは推して知るべしである。何より印象に残ったのは、その整然とした都市空間であった。イメージとしては、新宿の都庁舎を街のスケールに拡大したかの様で、いかにも新しい都市空間といった感じに見えた。昼食をとった後、県職員の方から新都心開発についてヒアリング。なるほど新しい都市空間創出というのはイメージだけではなかった。地上からの電柱一掃、車と人の分割を目的とするスカイウェイの導入や中水道システム、ごみの空気輸送等、目に見える部分、見えない部分ともに新しい都市システムの導入が予定されている。その後、市街地を見学したが、その頃になると最初は圧倒されていた私達も段々冷静さを取り戻してきた。「土が少な過ぎて照り返しが強い。」「デザインとして新しさが無い。」など偉そうな不満も出て来たところで、その日の予定は終了。内房線に乗り換えて館山の宿舎へ。

14日、浜金谷駅から、お待ちかねのフェリーに乗船、気分良く久里浜到着。ペリー上陸記念館前

で記念撮影の後、西浦賀の古い街並を見学し、渡し船を使って東浦賀へ。ここで私達は思いがけず某テレビ局の取材にあった。皆の心が浮き足立つまま、京浜急行で金沢文庫駅に至る。

あわただしく称名寺・金沢文庫を見学し、早足で柴漁港の漁業組合事務所へ向かった。少し緊張した面持ちで、組合員の方々が東京湾における漁業の歴史と現状についてお話し下さった。各行政体が東京湾沿岸の埋立てや開発を繰り返す中、「東京湾は一つのお椀のようなもの。一つの生きものとしてとらえなければ。」という、漁師の方の生の声が耳に残った。

さすがに皆の足どりに疲れがみえてきたが、いよいよ最後の巡検先、横浜の金沢埋立地である。金沢埋立地は、昭和40年代の人口増加、公害等による横浜都心における都市機能低下の状況を打開するため、工場等を埋立地に移転し、跡地を都市再開発に当てようと造成されたものである。全体の約40%を工場用地に、他を住宅用地や公園・緑地に当てる予定である。更には、海の公園と連結した「海洋性レクリエーション拠点」八景島も平成5年オープン予定である。その他、埋立事業と開発について、市職員の方々はわかり易く説明して下さい、この巡検の総括とするにふさわしい内容であった。

以上、かなり薄れた記憶を辿ってきたが、はっきり思い出せるのは、幕張に代表される計算しつくされた建物や街全体のフォルムである。また、失われた海辺を取り戻すために更に海辺を開発するという矛盾もぬぐい去れない。とは言っても、私達は相変わらずディズニーランドに行くだろうし、八景島がオープンすれば、やはり遊びに行くだろう。しかし、あの「きれいな」「きちんとした」空間に飽きたとき、私達はどんな街や海辺を望むのだろう。私個人はそんなことを考えたが、東京湾沿岸には実に様々な要素が凝縮されていたので、各自がそれぞれの視点をもって考えることが出来た様に思う。

(4月13日～14日 井内教官指導)